

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】品田 瑞穂

【所属】(助成決定時)北海道大学大学院文学研究科

【研究題目】協力性への期待と協力性の見きわめ能力:日米の比較研究

【研究の目的】

人間は他者との間でさまざまな資源を交換し、相互依存関係を形成している。それらの交換行動は、労働と給与、商品と代金といった物質的・金銭的な領域だけでなく、恩義に報いるといった愛情や情報などの無形の財にも及ぶ。このような「交換としての人間関係」は、社会的交換理論 (Blau, 1964; Emerson 1976) の登場以来、注目を集めてきた。その主要な問題の1つは交換において利己的な相手から搾取される社会的リスクである。それでは、このようなリスクのもとで、人はどのように協力的な相互依存関係を形成しているのだろうか。本研究の目的は、この問いに対し「社会環境の性質に応じて適応的な心の仕組みが異なり、他者との相互協力関係のつくり方も異なる」という適応論的アプローチを用い、相互依存関係が流動的な社会環境では、他者の協力性を見抜く社会的スキルが適応的になると考える。他方、相互依存関係が比較的固定的・安定的な社会環境では、人々は顔見知り以外の他者の協力性への期待を低く設定すると考える。この理論的予測を日米2つの社会に当てはめ、日本よりもアメリカにおいて見知らぬ他者の協力可能性を見きわめる能力が高く、相対的に日本においては見知らぬ他者の協力性に対する期待が低くなると予測する。

【研究の内容・方法】

＜質問紙調査＞

本研究では、日本社会を相対的に将来の相互作用に基づき応報的に機会主義的行動をコントロールしやすい社会環境として位置づける。対照的にアメリカ社会を、個々人の自由と自律性を重視するため相対的に相互統制が弱い社会の例として位置づける。このため長期的な相互依存関係にない他者、つまり見知らぬ相手に対する協力性の見積もり(期待)は、アメリカよりも日本において低いと予測される。この仮説(1)を検討するため、日本とアメリカの両方において、一般的他者に対する協力行動の期待、信頼(山岸、1990)、用心深さ等を測定する。

＜実験刺激の作成＞

本研究の仮説(2)は、日本人参加者よりもアメリカ人参加者において、見知らぬ他者の協力可能性を見抜く能力が高いというものである。この仮説は、将来の関係を担保にできない社会環境においては交換相手から搾取される可能性が高いため相手の協力性を検知する必要性が高いという理論的予測に基づいて導出される。この仮説を検討するため、見知らぬ相手の交換における行動や協力性、信頼性を推測させる実験を行う。研究2では、推測実験に用いる刺激を作成する。具体的には信頼ゲーム等の資源交換ゲーム及び質問紙を用い、相互依存関係における行動・態度を測定する。そしてそれらの参加者の動画を撮影し実験刺激を作成する。

＜協力性の検知実験＞

研究2で作成した実験刺激を用いて仮説(2)の検討を行う。具体的には、日米において研究2の参加者とは異なる参加者プールを用い、参加者に実験刺激——見知らぬ他者の映像——を呈示する。参加者の課題は、映像から他者が相互依存場面において協力的にふるまったか否か、どの程度信頼できると思うかを見積もった。この実験の結果と研究2で測定した実験刺激の人物の実際の態度・行動を照合することにより、他者の協力性を検知する社会的スキルを日米間で比較する。

【結論・考察】

本研究では、実験刺激の作成、および日米比較のための日本人データの収集を北海道大学において行い、アメリカ人データをカリフォルニア大学サンタバーバラ校において収集した。

質問紙調査の結果、日米において他者の協力性に対する期待(一般的信頼や用心深さ)は、予測に反し、有意な差が見られなかった。次に、協力の検知実験の結果においては、参加者の信頼のレベル×国籍×性別を独立変数とした3×2×2の分散分析を行ったところ、信頼の有意な主効果が見られた(その他の主効果および交互作用は見ら

れなかった)。このことは、日本においてもアメリカにおいても、他者の協力性を見極められる人々は高い一般的信頼を持つことを意味する。さらに刺激の特徴(年齢、性別、魅力度、顔きなどの非言語的の手がかり)を見きわめに用いる程度は、低信頼者よりも高信頼者において強く見られた。従って、高信頼者は低信頼者よりも対象のさまざまな手がかりに敏感であり、それらを活用して他者の信頼性を正確に判断していることが示された。